

今月のことば

人のいうことを
ナルホドそうかと
うなずけたら
何かそこには
小さな花が
咲くようである
榎本栄一

仏教詩人、榎本栄一さんの詩です。人の話を聞くというのは案外難しく、自分の関心や経験や思いでより分けて、きちんと受けとめられていないことも多いように感じます。もしうなずけたなら、小さな花が私たちの世界を広げてくれるかもしれません。

春の法要

令和8年4月12日(日)

13:00~14:00

勤行 法話 墓参

14:00~14:30

茶話会

共同墓地「無量寿苑」とペット墓地の合同法要を兼ねた春の法要です。ご遺族に限らず、どなたさまもお参りください。

四月同朋会(第二十曜日)

四月十一日

十二時から十四時

会費 1000円

四月の同朋会はお弁当を食べながらお花見会を行います。

出席ご希望の方で三月の同朋会を欠席された方はお手数ですが徳泉寺までご連絡ください。集合時間が早いのでご注意ください。

住職法話「正信偈より」

成等覚証大涅槃 必至滅度願成就

等覚を成り、大涅槃を称することは、必至滅度の願成就なり。仏陀(ブツダ)とは真理に目覚めた人、気づいた人という意味です。しかし自分の思いでいっぱい私たちは目覚めるとはどういうことなのか、何をもちて仏の悟りを得られたと言うのかかわりません。それを問い続け、教えに自分の身を置いていくのが仏道と言えます。『無量寿経』のなかで阿弥陀仏法蔵がすべての衆生を救済するために立てた願の第十一番目に「必至滅度の願」があります。これは、今はまだ仏ではないけれども、必ず仏になることがこの世にいる間に阿弥陀仏によって約束されるという願です。南無阿弥陀仏(阿弥陀の国に生まletたい)と私たちが口に出したとき、あなたは私の国に生まれて仏になることが定まりました、と阿弥陀のほうから約束された身になるということです。煩惱いっぱいのこの身で、仏になることは難しいけれども、必ず仏になりますよ、と約束された身であるとわかれば心安らかにいられます。

ことわざに「人事を尽くして天命を待つ」という言葉がありますが、明治期の真宗大谷派僧侶・清沢満之(きよざわまんし)は「天命に安んじて人事を尽くす」とおっしゃいました。迷い悩む煩惱いっぱいのわが身ですが、その身を受けとめ安んじて人事を尽くしていく事こそ大切なのではないのでしょうか。



ぼうもりのひとりごと
「100号おめでとう
ございます！」はがき
でメールでお電話で、
そしてご来院の折に。
たくさんの方から反響
をいただいて驚いてい
ます。『法話のコーナ
ー』にうなずいたり、
わからないことは反芻
して思考していま
す。『境内の花々』
が楽しみです。「まず
『ぼうもりのひとりご
と』から読みます。」
などなどなど。そう
か、おめでたいことな
のか、と。共に喜んで
いただけることに改め
て感謝申し上げます。

三月同朋会より